

eラーニングにおける授業内容と授業形態： 実践からの示唆

向後千春（早稲田大学人間科学部）
kogo@waseda.jp http://kogolab.jp/

1. はじめに

早稲田大学人間科学部では、2003年4月に通信教育課程（愛称「eスクール」）を開設した。これはフルサイズeラーニングシステムによる課程であり、科目の取り方によっては一度もスクーリングすることなく卒業が可能である。現在、開設2年目に入り、海外在住の学生を含めて、1学年約150人の学生を擁して運営されている。その全体像については、向後他（2004）で報告した。

この論文では、eラーニングの中で、とりわけ学習の資源（入力）、学習過程における相互作用（インタラクション）、学習の成果（出力）、フィードバック（評価）という4段階の授業サイクルに焦点を当て、それぞれの段階における材料の提供方法と運営について実践経験から考察し、授業サイクルモデルを提示したい。

2. eラーニングの学習サイクル

eラーニングの学習サイクルを大きく分けると、学習の資源（入力）、学習過程における相互作用（インタラクション）、学習の成果（出力）、フィードバック（評価）となる（表1参照）。

2.1 学習の資源（入力）

学習の資源（入力）は、ビデオオンデマンド（VOD）、Web教材、テキストやワークブックなどが考えられる。

VODは、インターネットを介して学習者に配信されるもので、eラーニングの最初の学習材料になる場合が多い。VODの収録の方法には、スタジオ収録、教室ライブ収録、対談などのスポット収録などがある（向後, 2004）。スタジオ収録、ライブ収録ともに撮影機材と専門の技術スタッフが必要であるが、スライドをパソコン上で作成しておき、それにICレコーダで録音した音声を同期させて、VODのファイルに編集すれば、専任スタッフなしに簡便にVODを作ることできる（山本, 2004）。

Web教材は、ある程度独習できるような教材を指す。できれば、短いビデオクリップを入れたり、ま

た、練習や説明のためのシミュレーションができるように統合されたWeb教材が望ましい。しかし、それを開発するには大きなコストがかかる。

テキストやワークブックはVODを補完するために有効である。学習に必要なすべての情報をVODで説明するのは時間がかかり、また、スライドをあらかじめ作成してあったとしても、学習者はそれをノートに写し取るだけで疲弊してしまう。詳細な情報はテキストに載せ、VODでは全体の話の流れに注意を集中させる。

2.2 相互作用（インタラクション）

次の段階は、相互作用である。具体的には、まずBBSを使つての討論がある。一口にBBS討論といっても、その設定の仕方によってインタラクションの頻度や内容は大きく変わる。たとえば、単に「討論してください」と指示した場合は、2割の活発な人

表1 eラーニングの授業サイクルモデル

サイクル	材料、メディア
1. 学習の資源 (入力)	・ビデオオンデマンド(VOD) ・Web教材 ・テキスト、ワークブック
2. 相互作用 (インタラクション)	・BBS討論（学生-学生、教員-学生） ・wikiによる共同制作 ・メーリングリスト討論 ・メールによる添削 ・電話による質疑 ・テキストチャット ・音声チャット ・AVチャット
3. 学習の成果 (出力)	・オンラインテスト ・レポート ・オンラインプレゼンテーション
4. フィードバック (評価)	・採点 ・改善案、アドバイス ・振り返り（リフレクション）

たちによる発言でほとんどが埋まり、残りの人たちはそれを見ているだけとなる。それを避けるために発言やコメントを義務づけると、様相が変わる。また、小グループを作ってコメントを付け合うという方法によっても変わる。

人数が10人以下であれば、メーリングリストを使った討論の方が適している場合もある。個別的な添削が必要であれば、メールによる添削をする。また、Web上での共同作業に適した環境（たとえばwiki）を利用することもある。

同時性を重視したい場合は、テキストチャット、音声チャット、AVチャットなどのメディアを使う。またオールドメディアである電話による質疑応答などが効果的な場合もある。

2.3 学習の成果（出力）

学習の成果は、オンラインテスト、レポート提出、また、オンラインプレゼンテーションといった形で表現される。オンラインプレゼンテーションというのは、レポートのバリエーションとして見て良いが、スライドショーに自分の声をかぶせたものをオンライン上で教員や受講生に見てもらうものである。また、レポートも伝統的な形式に則ったものばかりではなく、新聞形式やミニコミ誌などの形式を借用したのもテーマによってはマッチする場合があるだろう。

2.4 フィードバック（評価）

当然のことながら、学習の成果として提出されたものは評価を受ける。点数による評価が一般的だが、レポートの場合であれば、できればアドバイスや改善案をフィードバックしたい。その科目についてはそこで終わりかも知れないが、卒論を含めて、レポートは何度でも書く機会があるからである。また単に評価点だけをフィードバックする場合でも、ここで学んできたことを振り返り、これをこの先どう活かしていくかというきっかけを与えることも重要である。

3. 学習の規定モデルと活動のデザイン

以上見てきた学習サイクルで最も重要なことは、各段階の活動の内容はその後の活動の内容に規定されるということである（図1参照）。たとえば、BBS討論がどのように進められるかは、その後のテストの形態（選択肢テストなのか記述式なのか、レポートなのか、プレゼンなのか）に規定される。そしてBBS討論の形態は、入力であるVODの見方を直接的に規定するのである。たとえばBBS討論で問題発見が求められているのか、問題解決が求められているのかによってVODの見方は大きく変わってくる。

このように各学習活動は独立しているのではなく、一貫性を持って互いにリンクしている。eラーニングにおいては、学習オブジェクトのモジュール性が自明のように前提とされているが、この学習規定モデルによれば、むしろモジュール性ではなく活動の相互依存性に注目して、教育をデザインしていく必要があるだろう。

引用文献

向後千春・西村昭治・浅田 匡・菊池英明・金 群・野嶋栄一郎（2004）早稲田大学eスクールの実践：大学教育におけるeラーニングの展望『日本教育工学会研究報告集』JSET04-3, Pp.17-23

向後千春（2004）対面授業の内容をオンデマンド授業に移し替える：その方法と効果『大学教育学会第26回大会発表論文集』Pp.128-129

山本芳人（2004）ビデオカメラを使わないVOD講義コンテンツの作成とその教育利用『教育システム情報学会誌』Vol.21, No.21, Pp.117-121

付記

本研究は、平成15～18年度文部省科学研究補助金・基盤研究(B)(2)「ブロードバンドを利用した新しい高等教育の有機的モデルとプロトタイプの開発」（課題番号15300287）による支援を受けています。

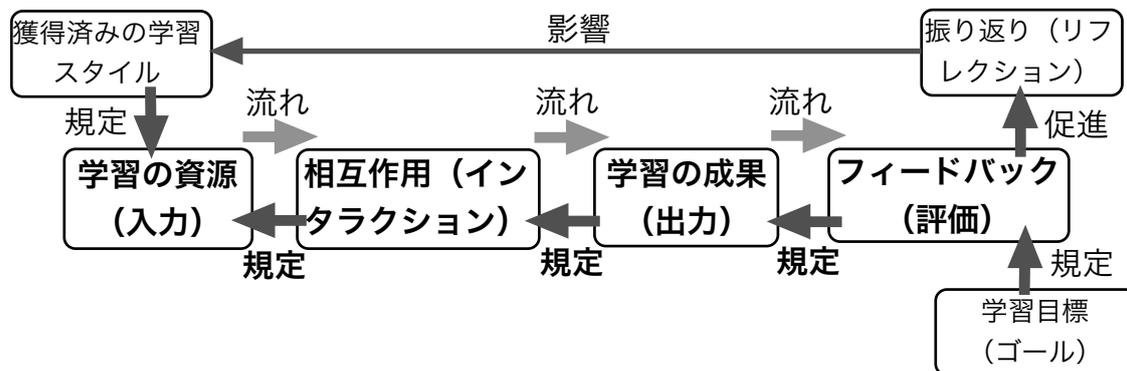


図1 学習活動を規定するモデル